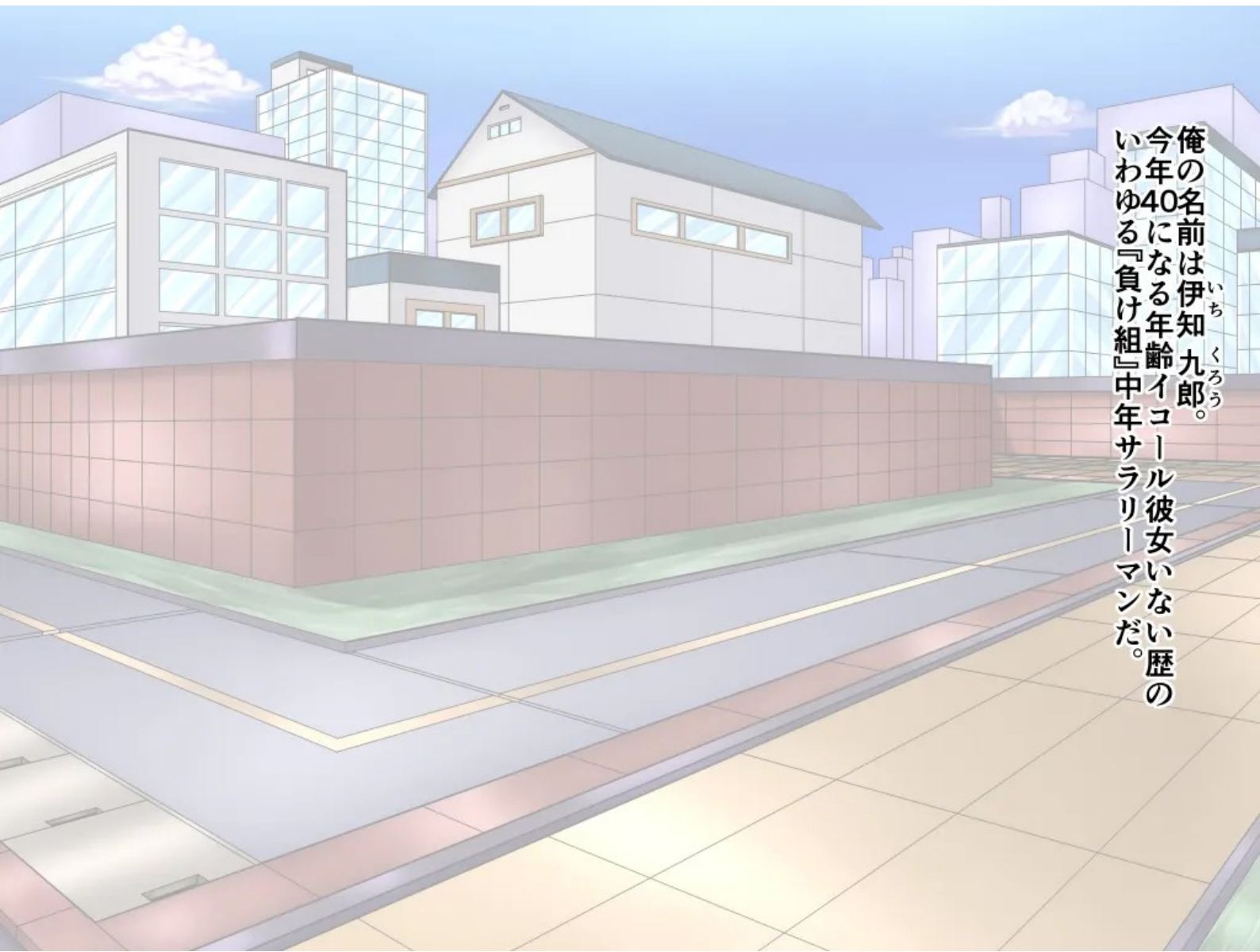




カイトリ ¥ オヤコ

～現役ギャルと淫乱母の
初ウリ×寝取り録～



俺の名前は伊知九郎。
今年40になる年齢イコール彼女いない歴の
いわゆる『負け組』中年サラリーマンだ。



童貞卒業も上司に誘われて行った
風俗店……金を払わなきゃ
女とやれないブサイク中年男の俺に――



いままさに信じられない出来事が
起きていた…。



「は……ええ!？」

「ねえオジサン!
私たちと……エッチしてくれない?」



そう：今俺は退勤途中の道端で：
ギヤルとその母親らしき人物に
逆ナンパをされていた：



「さっきキミ、何を言ってるんだ!?
隣にいる方…この子のお母さんですよ?
何とか言っておいてくださいよ!」



「もう！ママっつらいまさら何迷ってるの！
家で一緒にナンパするって決めてたでしょ！」

「あ…その…ええっしょ…」



「そ…そうね…えっと…お見さん？
よろしければ私たちと…うう…
エッチなことしませんか…？」



この母娘：…いつたい何考えてんだ!?!
新車の詐欺!?!怖い大男が連れ込まれたホテルで
出てくるとか…そういうやつか!?!

「う…ぐっ…」



「おおっ、オジサン話が早いね、さっそくやる気になってくれたの?」

「どっ、とりあえずここだと周りの目があるから…俺の家に来てもらえるかな?」



「違うよ！このままだと俺が警察に
捕まりそうだから俺の家で事情を
聞かせてもらうの！」

「うう…すみません……
お言葉に甘えさせてもらいますね……」



数十分後...九郎の住むアパート



「お邪魔します…」

「へえ、結構イイところ住んでるじゃん！
オジサン選んで正解だったかも♪」

「ふう…あのねえ…
まあとりあえず適当に座ってください
…いまお茶でも淹れるんで」



お茶を淹れながら：俺は人生で初めて
女の子2人を家にあげるといふ事態に
困惑していた：

当たり前だ！俺は40歳の
非モテ中年男だぞ！

と…やり場のない感情を整理しつつ…
まずはこの状況を把握しないと…
最悪俺が逮捕されてしまう…!!





「それで…おふたりの名前を
教えてもらえますか…？あとできれば
こんなこととしてきた理由も」





「僕は伊知九郎です…さて…
ええと真理絵さん？どうしてこんな
非常識…というか…突飛な行動を？」



「…つい昨年のことです…
この子の父親…夫の高橋と
別居状態になって…
理子と二人暮らしをしています」

「…でも女手ひとりで
高校生を育てるのが経済的に苦しく…」

「簡単に言うところクソオヤジのせいで
お金に困ってるから母娘そろって
エンコーすりゃよくね? ってハナシ♪」





「そういうことか…でも理子ちゃん…
若い女の子がそんな簡単に
身体を売ったりしちゃういけないよ」



「え、何オジサンお説教?
友達だってお小遣い目当てに
フツーにやってるしい」



「つかあたしなりに
毎日遅くまでパートで
働いてるママのこと
考えてるっていうかあ」



「えええ〜!? せつかくナンパ成功したのに
帰っちゃうのお!?!」

「こら理子! ダメでしょうそんな口をきいたら...
すみません九郎さん... 私たち... これでおいとましますね!」

別に成功してねえんだよなあ…
しかし…真理絵さんの悲しそうな
表情を見ておきながら
放っておけないよな…





いや!というより!このチャンス逃したら一生こんなかわいい女の子達とセックスできないぞ!



「ゴホン！ほ…本当に…お金を払えば…キミたちとエッチできるのかな？」

「えっ!?よ…よろしいんですか?こんなおばさんと…」

「おー！話がわかるねえ九郎オジサン♥
てかママ！何ひとりだけ稼ごうとしてんの！？
あたしがエンコー提案したんじゃない！」





まあ：親である真理絵さんも了承してるし…
未成年とエッチしても問題ないだろ：

そもそもお金のためにやってるんだし
むしろこっちがお客なんだ！気にすることない！

：我ながらクソみたいない言ひ訳だ：
でも：こんな据え膳食わなきや損だろ：！



「よし…そうと決まればホテルに行こうか…ここだとさすがに色々とマズいし…それじゃあこれ…とりあえず20万」

「えっ…はわー！こんなにたくさん…ありがとうございます！」

「うっそ…ひとり2万くらいだと思ってた…九郎おじさん…じゃなかった！パパすごい…♡」





一時間後：ホテル



本当に女の子を買ってしまった…
しかも美人親子…!!



これは夢か...? いや夢でもない!
とりあえず二人のカラダを楽しんで...

しかしふたりとも爆乳だな…
すげえ気持ちよさそうだ…



「お…おまたせしました
九郎さん…」

「パパおつまた〜♪
もう一人でシヨシヨしてたあ?」

「い…いえ…それより…真理絵さん…
その服…なかなか刺激が強いというか…」



「あつその…私の学生時代のもので…
サイズも合わなくて…すみません
ご不快でしたらすぐに
私服に着替え直します…」

「いえそんな!めっちゃ似合ってます…!」



「じゅっつ…ふたりともあたし放つて
イチャつくのマジウザいんですケド…
ママの制服コスプレ提案したのもあたしなんだから
感謝してよねえパパ♥」





「もう理子だったら…コホン！
えっとそれじゃあ九郎さん…？
なんでも…私たちにお申し付けください」



「あつたりまえじゃん♪
20万も払ってくれた九郎パパには
大サービスしなきゃね♥」

「ゴクッ…本当に…なんでも頼んでいいの？」



「よし…じゃあ真理絵に理子…
今日は俺のことをご主人様と呼ぶんだ…
あとパンツを脱いでおまんこ見せてくれ」

「あっ…はい…かしこまりましたご主人様♥」



「ちよ…いきなりハズいんですケド…
でもまあ約束しちゃったししゃーないかあ…
わかりましたご主人様…♡」





うおおおっ!!
なんだこの強烈な眺めは…

「えっと…こんな
感じで
よろしい
でしょうか？」

「うう…やっぱズレる…」





「すごい…真理絵の
おまんこは経産婦と
思えないほどきれいだ…」

「あうう…
恥ずかしいです
ご主人様あ…♡」



「理子のおまんこは
ぴっちり閉じてて…
もしかして処女？」

「うー！うっさい！
処女で悪い!？」

「それがご主人様に対する
口の利き方か！おらっ
処女マンコ開通！」

「ああっ…痛っ…!？」

「あっ…理子の…
娘の処女が…
ご主人様に…♡」

ずっ
ずっ
ずっ





「くおっ…現役ギャルJKの
生処女おまんこキツくて…
気持ち良すぎる……！」

あっ

んんん

ぽぽぽ

ぬちゃ

んんん

んんん



「あっ……あん……っ♡
ご主人……さまあ……♡
あたしの処女……
味わって……っ♡」

ぽぽぽ

んんん
ぬちゃ
あっ

んんん

あっ

ぽぽぽ
んんん
んんん

んんん

「まったく…こんな
いやらしい体でしかも処女？
けしからんぞ理子！」





「うう……んっ♡
ご主人様のために…
取っておいたん…
だよ…処女…♡」

ぽぽぽ

んんん
ぬちゃ
あっ

んんん

あっ

ぽぽぽ
んんん
んんん

あっ



「ああっ…あたし…♡
処女なのに…ご主人様の
オシサン精液いきなり
中出しされちゃう…う♡」

ピ
ピ
ピ

ん
ん
ん
あ
あ
あ

ん
ん
ん

あ
あ
あ

ピ
ピ
ピ

ん
ん
ん

ズ
ズ
ズ

ん
ん
ん



「出るっ！
受け止める理子オ！」

「あはああああっ♡♡♡」

いっしょに

「さて待たせたね…
真理絵の熟成おまんこ
いたたくよっ…！」

「ああん♡
数年ぶりのおちんぽ…
きちやいましたあ…♡」





「すっぴん……すっぴんです
ご主人様……♡んはあっ♡」

ぽんぽん

んんん
ぬちゅ
あやっ

んんん

あっ♡

んんん
んんん
んんん

んんん



「ぐおっ…こんな
エロい体数年間も
放っておくとか
旦那さん不能かな？」

「あん♡そう…です…
夫は全然かまって
くれなくてえ…」♡



「そうかそうか…
じゃあこれからは
俺専用の肉オナホに
なりなさい真理絵」



「ぐっ…みっちり
ねっとりおまんこが
締め付けてきた…
辛抱たまるん！イクぞー！」





イッぽん

「イッぽん♡♡♡」

「ふう……さて
これが契約完了の
中出しだ……明日も
お金を上げるから
順番に私の家に来なさい」

「はい……ご主人様……♡」

「ふっ……ママったらもう
完全にご主人様の
おちんぼにハマってんじゃん……
ま……あたしもだけど♡」





翌日
俺は真理絵を制服姿で
待ち合わせ場所に呼び出した。

なんで制服で来させたかといえは…
そっちのほうが援助交際っぽくて
興奮するからだ…!!



「おっ来たね真理絵…制服にあってるよ
やっぱりスタイル良いからかな」

「九郎さん…お待たせしました…っ」




「ハハハ…それじゃ早いところホテル行こうか」

「もう…この格好で街中歩くの
恥ずかしかつたんですからね？」



「うぐ…なんだか急に罪悪感が……」

「ふふっ…しょうがないですね九郎さんは…♡
理子みたいに言うなら…『マジえっちい』ですね♡」




そして…俺と真理絵は
他愛ない世間話をしながら
ラブホテルへと向かった…

なんというか…女の子と付き合うって
こういう感じなのかなあと
物思いにふけたが、
これはれっきとした援助交際だと
言うことを思い出し我に返る。




「う…うるさいなあ…
お世辞はいいよ…こんなブ男
お金を払わなきゃ
女の子と関係持てないし…」

「ふふふっ♪九郎さんって
誰かと付き合ったことなかったんですか？
こんなに素敵な男性なのに…私なら
放っておかなかったなあ♥」



「…私…本当にお金に困ってたんです…
私たち親子からすれば九郎さんは…
白馬の王子様なんです」

「いや王子さまって…
君たちに頼まれたとはいえ
ただエンコーしただけだし…」



「あんな娘ですけど…理子は私のことを考えてくれて…一生懸命考えて出た結論が援助交際だったんです」

「九郎さんは娘の提案を笑わずに受け入れてくれて…嬉しかった」

「真理絵……」



「ゴクッ……それって……俺が理子の父親になっちゃうってことだけ……いいのかい？」

「だから私を……援助交際としてじゃなく……本気で抱いて……欲しい……九郎さんに……♡」



「あっ…♥九郎さん…♥」

「それじゃあ…挿れるよっ！」

ずっろろろ



「ん…ちゅうっ♡
私…丸郎さんの体温…
感じちゃいますうっ♡」



「真理絵…これからは
お金の心配はしなくて
いいからね…俺が
君たち母娘を養うから」



「みたい」じゃなく
本当になれっ!
俺の嫁になれ真理絵!



「んむっ...♡
なる...なっちやいますら...♡
亭主よりたくましい
おちんぼで九郎さんの
女になりましゅうっ♡」



「んあああああっ♡♡♡♡」

ゼクッ

「イぐっ！」

イグッ

BY



「あ…あ…あ…♡♡♡」

「はあ…はあ…
じゃあこのあと理子に
会うから…きちんと
伝えておくからね…」

真理絵との恋人セックスも
終わり…真理絵とはそこで
家に帰ってもらうことにした。

というのも——
あらかじめ隣の部屋に
理子を待たせておいたからだ。



母親の真理絵とのセックスの音を隣で聞いていた理子の反応を見たい…そんな好奇心からだった。





「あひ……あひか」

「やあ理子……こんにちは」

「あひか」

「どもって…昨日と違ってずいぶん
他人行儀だね…」

「そりゃあエンコー
提案したのあたしだけどさくさ…
なんかママとめっちゃラブラブしてて
ちよいフクザツっていうかあ」





「そんなことないって！
理子だってかわいいよ！
イマドキのギャルって感じで…ほら！」

「へえ〜？
じゃああたしのこと本当に
かわいいって思ってるかテストしよ♥」

「…んしょっと…ほら見て…
九郎パパに処女あげちゃった…
女の子の裸だよ♥」


「ゴクリ…や…やばい…同意の上と
わかっていても犯罪臭が…」





「…ね…パパ…あたし…
あなたに本当のパパに…
なってほしいって思ってるよ♡」

「き…聞こえてたんだね
…真理絵との会話」



「あたし…父親には恵まれなかったから…
九郎パパの優しいところに…
あたしのバカみたいなた提案受けてくれたところにね…
マジで惚れちゃったというか…」



「…ごめんあたしバカだからうまく言えないや
…でも…父親としても男の人としても…
パパのこと好きになっても…いい？」

「もちろんだよ…俺も…
母親想いの優しい
理子のこと好きだ」



「これが証拠だよっ！」

「あっ...はあっ♡
パパのぶっといの...
いきなりきたあっ♡」

ピッピッ
ピッピッ
ピッピッ

ジュジュ
ジュジュ
ジュジュ

ピッ
ピッ
ピッ

ジュジュ
ピッ
ピッ

あっ♡
んんん♡

「くっ…さすがに
処女卒業したてな
だけあって…
キツキツだね」

ピ
ン
キ
ン
キ
ン
キ
ン

ぬ
ち
ゅ

ズ
ン
ズ
ン

サ
ッ
パ
ン

あ
ん
こ
う



「理子っ理子っ！
そろそろ出すよ！
パパの愛情ザーメン
たっぷり出すからねえっ！」

ズッ
セッ
ッ

ぬちゅ
ちゅ

パン
パン
パン

サ
サ
パン

あ
ん
ん





「きてきてきてきて♡
理子のおまんこに…
パパの精液ぐちよぐちよに
中出ししてええっ♡♡♡」

あっ♡♡♡♡♡
♡♡♡♡♡




「いっせーのー」

びゅん

「理子…今日からみんな家族だ…
帰ったらママに伝えておくんだよ？」

「うん…♡♡♡
これからよろしくね…
パパ…♡♡♡」






ふたりとの交際を始めてから数日…
真理絵と理子の両方と
何度もセックスをしてきた。

そして今日はずいぶん…
いわゆる『家デート』をすることになった。



「たっ…ただいま！
…なんか新婚さんみたいだね」

「九郎さんいらっしやい♪
あ…『おかえりなさい』❤️」



「ふふっ…理子もすっかり
九郎さんに甘えてるし…
そろそろ本当に結婚…しちゃいます?」

「…そうだね…そうすれば
毎日ふたりとエッチし放題だし」

そんな他愛のない会話を
しながら俺たちは寝室へと向かい…
セックスを開始した。



しかし…その最中
突然真理絵の夫…
高橋から電話が入ってきた。



「んっ……♡♡♡もしもし……
あなた……?電話なんて
珍しい……んっ♡♡♡
ですっね……っ」

おっぱい♡♡♡
おっぱい♡♡♡

おっぱい♡♡♡

おっぱい♡♡♡

あっ♡♡♡

くっ♡♡♡

おっぱい♡♡♡

おっぱい♡♡♡

本当にいまさらだと俺も思った。
娘の理子がどんな思いで援助交際に
踏み切る決意をしたのか



そして夫に見放され
女手一つで子育てに
尽力してきた真理絵を
思うと...高橋に怒りを感じた。



「本当のことを言うんだ真理絵！
俺とのセックス聞かせてやれよ」

あ？

はーん？

ピン

ズキ

ニギ

はーん？

ちゅ



ピンポン

ズキ

あ

キーン...

ニギ

いっお

さっ
ちゅ

「いま...お付き合...
してる方がいてっ...
そう...とても...優しいのっ...」



「は…はいい♡♡
いま…その人と…せ…
セックス…してるんです…♡
あなたと…比べ物にならない♡
くらいすごいですよ…♡♡
」



「すぐく...んはあっ♡
頭真っ白になるくらい♡
気持ちいいのおっ♡♡」

「ぐうっ...そろそろ出すぞ...
旦那との電話越しに
人妻浮気おまんこ
アクメ射精決めるぞおっ！」





いっ
は
ん

ズ
キ
ン

あ
っ
♡

き
ん
ん

ん
ん

い
っ
は
ん

き
ん
ん

「あなたっ♡♡
私のイく声聞いてっ♡♡
あなたより強いオスに♡♡
孕まされる声聞いてええっ♡♡」



あま...

あま...


びゅん!!

びゅん


「はぁ…はぁ…♡
あなた…そういうことだから…
私たちのラブラブセックス
妄想しながら…一人寂しくシコシコ
しててくださいね…♡」

「ふっ…
寝取りセックス
気持ち良すぎ…」





それから数日：理子の通う学校で
保護者を装い侵入：もとい
三者面談にやってきた。



真理絵が、「パートのシフトが入っているため都合がつかない」とのことと頼まれたのだが――

学校での理子の姿に興奮し
空き教室に忍び込みセックスを
始めてしまった。



「おい理子…入り口でゴソゴソ
覗いてる男子…お前の知り合いか？」

「んっ♡…ああ…
斎藤くんだよ…なんか
この前コクられたんだけど…
断った…んあっ♡」



「そうかそうか…じゃあ全く脈がないと
証明するためにずっぽしハメるとこ見せないとな！」

ずっぽし

くっくっ

「あんっ♡♡パパの
おちんちん…きたあっ♡♡」

「んっ?どうした理子...
自分を好きな男子に見られながら
セックスするの気持ちいいか?」





「んっ...だつて...
ハズい...からあ♡♡♡」

あ♡♡♡
ん♡♡♡

ぱんぱん

ぬちゅ

ごちゅ

ん♡♡♡

ぱんぱん

ズキズキ

んゅ

ちゅ

「まったく：露出癖まであるなんて
理子はやっぱり淫乱変態JKだな」





わんっ♡
わんっ♡

ぱっ!
ぱっ!

ぬちゅ

ごゅい

ズキキ

んゅ

ちゅ

んゅ♡

ぱっ!
ぱっ!

「いやっ...♡
変態って言うなあっ♡♡」

「ほらっ理子…片思いされてる男に見られながら無様にイけっ！イきさらせっ！」





あんなに♡♡♡

ぱんぱんぱん

ぬちゅ

ごちゅ

ズキズキ

んんん

ちゅ

んんん♡

ぱんぱん

「イク...イっちゃやう...
見られながら...
おまんこビクビクって...えっ♡♡」



「ふう…気持ちよかった…
斎藤くんにおカズ提供したことで
このことはチャラにしてみらえ」

「うん…♡
わかったよパパ…♡♡♡」



…などと真理絵と理子に
激しめかつアブノーマルな状況での
セックスをしてしまったことが原因で…

ふたりは俺の家に押しかけて
『抗議』をしにきたのだった…。



「わあっ…広いお家に
住んでるんですね九郎さん♪」

「ほんとほんと〜♪いかにも
鬼畜なプレイが大好きなオジサンの
すみかってカンジ〜♪ね？ママ」





「教室であたしを好きな男の子の目の前で
エッチしちゃったり?」

「元夫と電話させながら
エッチしたり?」

「ご……ごめんなさい……
つい欲望に負けて……」



「ママと相談したんだあ…
それで…パパにも恥ずかしい思いを
してもらおうってことになったよ♡♡」

「ふふっ…それはですね…ね〜理子♡」

「…返す言葉もないです…
どうすれば許してくれる…かな…?」



そしておもむろに俺のズボンと下着を脱がし始め…
ベッドに押し倒してきたのだった…!!



「女の子にわるいことしちゃう
いけないおちんちんにはあ……♡♡」

「理子ママのJKおっぱいと♡」

「ま……真理絵ママの
いやらしいおっぱいで
お仕置きしちゃいますね……♡♡」



「理子…そろそろ始めましょうか♥」

「そうでちゅよ〜♪
焦ってて超ウケる♥」

「ま…ママあ…!?!」

「ほらっ...ほらっ♡どろっ♡
理子ママと真理絵ママの
おっぱいにおちんちん
いじめられちゃってまちゅよ?」



あっ♡

すっ♡

あん♡

さっ♡
ぱっ♡

ぱっ♡
ぱっ♡

「すっごっ…理子のハリのある
おっぱいと真理絵の
柔らかおっぱいのハーモニー……」



「こら！九郎ちゃん！
『ママ』でしよ〜？」

「そうですよ九郎ちゃん？
しっかりおっぱいで
教育してあげますからね♡」

あっ♡

すっ♡

あん♡

さっ♡
ぱん♡

ぱん♡
ぱん♡





「うっ…わかったよママあ…
おっぱい気持ちいいよお…」

あっ♡

すっ♡

あん♡

さっ♡
ぱん♡

ぱん♡

「あん♡いま九郎ちゃんのおちんちんビクッてした♡」

「あはっ♪意外と早く落ちたね♡」

あん♡

すいっ♡

あん♡

さっしゅん♡

さっしゅん♡





「そろそろイきそうなのかなあ？
ふふっ…じゃあトドメさしちやおうかな♡」

あっ♡

すっ♡

あん♡

さっ♡
ぱん♡

ぱん♡
ぱん♡

「イって♥私たちの
おっぱいの間で気持ちよく
射精してくださいね♥」

「あっあっ……!
搾り取られるっ!」

あっ♡

すっ♡

あん♡

さっ
ちゅっ
ぱん

さっ
ちゅっ
ぱん



「イっくうううううううっ！
ママあああああっ！」

「あっは…♡恥ずかしい格好で
情けなく射精しちゃったね♡」

しゅるん

「すごい…♡♡おっぱい妊娠しちゃいそう…♡♡」





「私たちのことも気持ちよくしてくださる♡」

「じゃあ気持ちよく射精したことだし…」

数分後
—
寝室



「それじゃあ理子…
挿れるよっ…!」

「あっ…♡♡
すっっ…深くに来てるっ…♡♡」

↑
↑
↑



「それにしても…真理絵と
あんないやらしい
ご奉仕してくれるなんて…
嬉しいよ」





「んっ…♡ちよつとおー
あれはお仕置きなんだよお…っ」

あん♡

あ♡

はあはあ

ぬちっ

ほっ

っ
っ
っ
っ
っ

ちっ

っ
っ
っ

「ごめんごめん…でもふたりの
おっぱい気持ちよかったからな」



あ〜♡

あ〜♡

はあはあ

ぬちゅ

ほっ

〇〇〇〇

くちゅ

〇〇〇〇



「それならいいけど……
あん……♡♡♡す……
子宮に届いちゃうっ♡♡」

あん♡

あ♡
はあ
はあ

ぬちゅ

ほっ

〇〇〇〇

ちゅ

〇〇〇〇

「理子も何回もエッチして
だんだんと俺専用の形に
なってきたんじゃないか？」



あ〜ん♡

あ〜♡

はあはあ

ぬちゅ

ほっ

ぽっぽっ

くちゅ

ぱっ



「なってるよお...♡
私のおまんこ...絶対
パパの形に♡」

あ〜ん♡

あ〜♡

はあはあ

ぬちゅ

ほっ

〇〇〇〇

くちゅ

〇〇〇〇

「こみあげてきた…っ！
そろそろ特濃子種ミルクを
子宮にぶちまけるぞ！」



あゝん♡

あゝ♡
はあはあ

ぬちゅ

ほっ

ぱん

ぱんぱん

くちゅ



「出して…私の…
本音でママを…」

あ〜ん♡

あ〜♡
はあはあ

ぬちん

ほっ♡

〇〇〇〇

くらん

〇〇〇〇



「〜んんんんん〜」

「あ〜んんんんん〜」

「あああああっ♡♡♡♡」

「いやあ最高だったよ理子…
今度はママのことも妊娠させてくるからね」





「うん♡♡私妹が欲しいなあ♡♡」

理子とのセックスが終わり…
客室に待たせていた真理絵のもとへ
向かった。



「おまたせ真理絵
…さっきは理子に中出ししてきたよ」

「もう…それは母親の私に
わざわざ言うことなんですか？」



「はは…今度はちゃんと真理絵にも
がっつり中出ししてあげるってことだよ」

「まあ♥それは楽しみですね♥」



「さあほら…
いまから中出しされる
かわいいおまんこ
見せてくれ」



「は…はら…
私のおまんこ見てほしいです…❤️」



「それじゃあお待ちかねの
おちんぼ挿れるぞっ!」

「あっ♡九郎さんの
おちんぼ様きたああっ♡」

↑
↓



「ああっ…ねっとり絡みついて
気持ちいいよ真理絵…」



「そうですねっ♡
このえっちなおまんこから
理子産みましたあっ♡」



「このおまんこから
俺の子ども産んでほしいなあ」



「うおおお金玉から
精子とみあげてきたぞ真理絵！
射精するぞおおおっ！」



「あっ…♡きてっ♡
いっばいおマンコの中で
精液注入してええっ♡♡」





「ああああっ♡
イっくうううっ!!♡」

びゅん

「はぁ…すごい今までで一番出たよ」

「あっ…膣内からどぶっって出てきた…♡」





そして1か月後：
真理絵は高橋と別れ：



俺たちは真の家族になった。

まあ…母娘ふたりとも肉体関係を
持っているので普通の家族とは違うが…



「今日はあゝ私たちが
ほんとの家族になった
記念日だね♡♡」





「九郎さん…いえ…あなた♡♡
お礼の母娘フェラ…味わってくださいね♡♡」

「真理絵...理子...
それじゃあおちんぽに
おくちでご奉仕してもらおうかな」





「んあっ...すごう...
あたしたち...このおちんぼでこれから
毎日しつけてもらえるんだね...♡」

ぽろぽろ
ちゅぽい

ハッハッ

くちゅん

ちゅん♡

すけろ♡

ちゅん...♡

♡♡♡

ハッハッ





「あつちり押しやるさー
ぢゅるるるっ♡♡
私も丸郎さんのおちんぼ
べるべるするんですから…♡」

あはっ♡
はっ♡

はっ♡
はっ♡

くちゅっ♡

ちゅっ♡

はっ♡
はっ♡

はっ♡
はっ♡

はっ♡
はっ♡

はっ♡
はっ♡

「真理絵と理子のおっぱりと
かわいいお顔見ると
永遠に勃起できそうだよ」





「んっ♡あたしも...
パパのおちんぼなら
ずうっつとご奉仕したい♡」

ちゅっ♡
ちゅっ♡

ちゅっ♡
ちゅっ♡

ちゅっ♡
ちゅっ♡

ちゅっ♡
ちゅっ♡

ちゅっ♡
ちゅっ♡

ちゅっ♡
ちゅっ♡

ちゅっ♡
ちゅっ♡

ちゅっ♡
ちゅっ♡



「ああん♡射精して...♡
理子のお顔にいつぱい♡
パパの赤ちゃんミルクい♡
ちようだあい♡」

ぽろぽろ♡
ちゅぽ♡

ハッ♡
ハッ♡

くちゅ♡
くちゅ♡

ちゅ♡
ちゅ♡

すけ♡
すけ♡

ちゅ♡
ちゅ♡

ハッ♡
ハッ♡



「あなた♡♡真理絵の♡♡
いっやらしいおちゃんぽ顔に♡♡
恵んでくださいっ♡♡」

ちゅっ
はっ

はっ

はっ
ちゅっ

はっ
ちゅっ

はっ
ちゅっ

はっ
ちゅっ

はっ
ちゅっ



あゝ
んんん

あん♡♡
射精てる♡♡
いっぱい♡♡
いっ♡♡

あ
あ
あ
きたあ♡

ぽんぽんぽん!

んんん!!

「はあ……♡パパの精液の量
えぐすぎ……♡」



「うれ……のどに絡みついて……♡
あなたにおくちまで妊娠
させられちゃいますね……♡」



冴えない40のサラリーマンの俺は
突然ふたりの家族と幸せを
手に入れた…





いまでは心から提案に乗って
よかったと思っている。

始まりは理子の
奇妙な提案からだだったが…

そして1年後：俺たちに新しい家族が
『ふたり』増えることになるが：
この時の俺はまだ知る由もなかった





「…ほら理子！学校遅れちゃうわよ？」



「はい！でもパパも遅れてるよお？」



「あなた♡もう今は2児のパパなんですから
しっかりしてくださいね？」

「ごめんごめん…すぐ行くよ！」



「そうそう♥あたしの子と新しい妹の
自慢のパパになってもらわないと♥♥」



愛する家族のため…
今日も頑張るか!

…ということではいろいろ
大変そうだけど…



もっと大きな幸せを
彼女たちに『買う』ために――。

